

## 山下明郎や261111

弊社監査役の山下明郎さんが7月18日に心不全のために亡くなった。享年85歳だった。

山下さんに弊社の監査役をお願いしたのはカルビーポテトの監査役を退任されたからだ。お付き合いは在職中からだった。

最初の出会いは1980年代だったと思う。当時、農作業学会の会長だった塩谷哲夫さんに誘われて東京農工大学で行われた研究会でのことだった。その帰り、山下さんを含めて三人で中野駅近くの飲み屋でたたかに飲んだ。山下さんはカルビーポテトの社員として塩谷さんに馬鈴薯生産の作業改善について研究委託をする立場にいた。

# 江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

山下さんと一緒に水田農家に転作としての馬鈴薯作りを勧める活動に取り組んだ。山下さんにとつては産地開発だった。本誌としては同社に評価を求めるものではなく、読者に農業経営の新しい可能性を売り先の紹介をセツトにして提案することだった。そうした取り組みがその後のカルビーや故・松尾雅彦氏との関係を生み出した。

作り、やがてカルビーポテト発行の『ポテカル』を創刊から我が社で編集することにつながった。

加工用馬鈴薯の産地開発の取り組みは、ハーベスターを引けるレベルのトラクターを持っていると同時に畑作業体系を導入している水田農家を山下さんとともに訪ねることだった。やがて山形、千葉、福井、岐阜、岩手などで手を挙げる人が出てきた。一人5haを目安とした。当時のハーベスターの処理能力は一日50a程度、晴れて作業ができるのはせいぜい10日。雨が降れば土が乾くまで作業できない。彼らに一台500万円はしたハーベスターを買わせるのは経営的に見合わないだろうと考えた。それで我が社が機械を持ち、皆はそれをレンタルすることにして、産地間の機械の移動の相談は皆で打ち合わせてもらう。移動のための運送業者も山下さんがカルビーポテトの出入り業者に頼んだ。産地が西から北にばらけているのは収穫時期がずれるため、機械を産地リレーしながら動かしていくためだった。「我が社が機械を持って」と書いたが、機械の購

入費は山下さんの退職金だった。一緒に取り組んだ読者たちは本誌を通じて以前からの知り合いで常識のある人々だった。皆からのレンタル料金で回収ができるとはいえ、山下さんの退職金を投じての事業だった。

読者に対してはカルビーポテトのフィールドマンだけでなく、当時北海道農業機械工業会の専務理事だった村井信仁さんや土壌コンサルタントの関祐二さんに指導を頼んだ。これだけではなかった。旧知の読者から馬鈴薯の売り先を相談されると山下さんは北大東島や沖永良部島にも出向き、加工用だけではない青果用としてカルビーに売れないかと相談に乗っていただいたりもした。

山下さんは我が社の歴史をともに作っていただいた尊敬する兄貴のような人物だった。



カルビー元社長である故・松尾雅彦氏の追悼座談会企画に出席した山下さん。本誌2018年4月号の特集に掲載した。